

## エジプト日本学校（EJS）における学級会の特徴（2） ～シーケンス分析に基づく経年変化～

○山田真紀 小泉琢磨 土屋愛 京免徹雄  
(梶山女学園大学) (深谷市立藤沢小学校) (熊谷市立久下小学校) (筑波大学)

### 1. 研究目的と方法

#### (1) 研究目的

エジプトのエジプト日本学校（EJS）が TOKKATSU に取り組み、学級会を導入して5年が経過した。この間、学級会の質はどのように変化したのか。本研究では、学級会の質の変化を授業研究の手法を用いて実証的に明らかにすることを目的とする。

#### (2) 研究方法

研究方法として、山田・清水の学級会の授業分析を用いる。2019年1月に行われた2つの学級会（1年生）と、2023年12月に行われた2つの学級会（6年生）を対象とし、「逐語分析」「分節分析」「シーケンス構造分析」の3つの分析を行う。逐語分析とは、発話を書き起こし、誰がどのくらい発言しているかの割合から、学級会の特徴を明らかにするもの、分節分析とは、分節（同じ話題に属する発言のかたまり）の内容、そこで用いられる論理、分節の終わり方を分析するもの、シーケンス構造分析とは、分節がどのような関係性を持ちながら時間の経過とともに展開するかを図式化し、分節分析と合わせて、合意形成のプロセスを分析するものである。

### 2. 分析と知見

#### (1) 逐語分析

逐語分析では、4つの話合いにおいて①総発話数、②教師と司会グループの発言の割合、③発言回数が多いの児童の発言の割合を算出し、話合いが教師主導であるか司会グループ主導であるか、一部の児童の発言から進行するか全員の方遍ない参加が認められるかを分析した。

その結果、2019年に比べて2023年の学級会は①教師主導から司会グループ主導と変化し、②発言回数には児童による多寡はあるものの、多くの児童の参加する学級会へと変化していた。

#### (2) 分節分析

合意形成のプロセスのなかで、出された提案を「しぼりこむ」「きめる」で用いられる論理に注目した。その結果、①「しぼりこむ」では、2019年では教師の恣意的な取捨選択により、2023年では黒板書記の理解力の限界により、提案の網羅性は担保されず、結果的に検討の俎上にあがる提案はしぼりこまれていること、②「きめる」では多数決は用いられないこと、決める方法は2019年では「不明」あるいは「意見を組み合わせる」だけであったのが、2023年には「意見を組み合わせる」に加えて「少数派を説得する」「ひとりでも賛同しない子がいる場合は廃案となる」というルールが子ども達に共有されていることが分かった。

#### (3) シーケンス構造分析

2019年も2023年ともに「出し合う」「比べあう」「決める」(×2つの柱)「ふりかえり」「先生のお話」の緑本の構造で話合いは進むこと、2019年では、同じ分節に属するシーケンスがとびとびに現れ(=議論が行きつ戻りつする)、また単発で宙に浮いたままのシーケンスが散見されたのに対し、2023年では、まとまりのある重層的なシーケンスが積み重なる構造となり、ひとつの提案について、吟味して取捨選択する様子が現れるようになった。

### 3. 考察

5年間で学級会の構造は驚くほど変化したが、特に提案のしぼりこみと合意形成のプロセス等に課題も見えてきた。当日は課題解決の方法についても議論したい。

※分析データや参考文献は当日資料にて。

謝辞:本研究は、令和5年度 文部科学省 EDU-Port ニッポン調査研究の助成を受けた。